



今日から2026年（令和8年）の土曜塾がスタートしました。午（うま）年は、情熱と勢いが高まり、大きな飛躍のチャンスとなる年だそうです。特に今年は、「丙午（ひのえうま）」にあたり、火の力が重なることで、エネルギーに満ちあふれるパワフルな年とされています。新しいことやあきらめかけていたことに挑戦すると良い結果につながるそうです。今年度の土曜塾も今日を入れてあと10回です。積極的に参加しましょう！

おおみそか  
こたつに入り  
家族みんな  
小さな白黒テレビに  
映し出される紅白歌合戦を  
見ていた  
宮田輝アナウンサーが  
軽妙な語り口で進行し  
大人の歌手が大人の歌を  
歌っていた  
フィナーレの蛍の光の合唱に  
今年も終わるのだなあ  
子どもながらに一抹の  
淋しさを感じたものだ  
その後 画面は雪が降る  
寺社の映像に変わり  
「ゆく年くる年」が始まる  
除夜の鐘が鳴り  
新年を祝う人々の  
初詣の様子が映し出される  
年が変わる時の  
一種独特の雰囲気の中で  
母が作った年越しそばを  
食べていた  
そんなお正月はもう今はない  
そんなお正月がかつてあった  
ことを ちょっぴり懐かしく  
思い出す



読書のすすめ「アルジャーノンに花束を」～曾根静香先生（和霊教室）

クリスマスの時期になると、昔サンタクロースからもらった『アルジャーノンに花束を』という本を読み返したくなります。

当時小学5年生だった私は、表紙に貼られていた推薦図書のシールがなんだか怖くて苦手だったため、本を開かずそっと本棚にしまいました。やがて小学校を卒業し、中学生になり、2年ほど経ったある日の夕方、数学の宿題から逃げて、やっと読み始めました。一気に読んで、夕飯前に読み終えて、ぼろぼろ泣きました。涙にそば濡れた顔で食卓に着くと、母親に「あんた、なんで宿題して泣いてんの」とぎょっとされました。

本の内容をざっくり紹介すると、主人公のチャーリー(32歳男性)が脳の手術を受けて、どんどん勉強ができるようになっていき、世界的に優秀な学者達より賢くなるものの、その知能はまた失われてゆく、というストーリーです。タイトルのアルジャーノンとは人ではなく、チャーリーの前に手術を受けた、実験用マウスの名前です。

14歳の私がなぜ泣いたかということ、健気で清らかな心を持つ主人公をあまりにも救いが無いと感じたからです。それが可哀相で悲しくて好きな本だとは思えませんでした。

それから10年後、同作は実写化で話題になり、社会人になっていた私は懐かしい気持ちで読み返してみました。すると、それまで抱いていたものとはずいぶん異なった印象を受けました。チャーリーと関わっている人たち、特に親しい人たちはみんな、彼にできるだけ優しくしようと努めていて、むしろ優しいのではないかと感じたのです。うまくできているかどうかは別として。

それから何年かおきに読み返し、そもそもチャーリーは可哀相なのか、彼にマイナスの感情をぶつける人は果たして悪人なのかと、感想の方向性が毎度毎度変わりました。X年経った今では、悲しさを別の感情が上回り、登場人物全員にいとをしさを持つようになりました。チャーリーと関わった人全員に、深い人間味を感じるからです。

もちろん本の内容は変わらないので、単に私の感受性が年齢に応じて変わったせいなのですが、それでもここまで感想がコロコロ変わるという経験を、他の本でしたことがありません。とても面白いことです。

よければ一度、読んでみてください。涙する人もいれば怒りを抱く人もいるでしょう。特に感情を動かされない人だっているでしょう。どれも今だけ、期間限定の感覚です。そしてぜひ、大人になってもう一度読み返してみてください。少しでも感想の変遷を味わってもらえたら、こんなに素敵なお話はありません。

